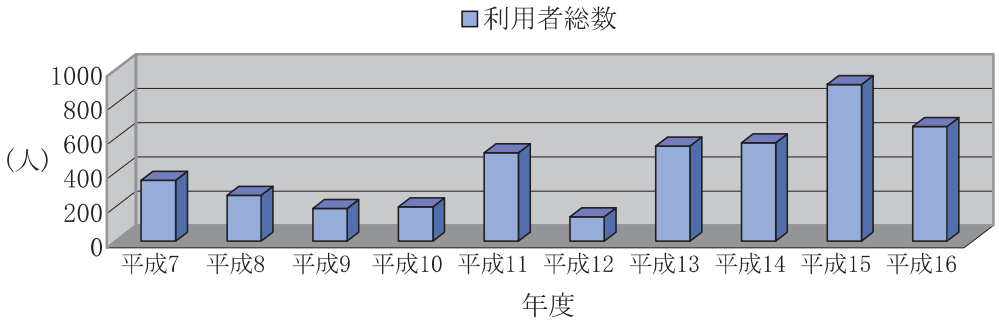
第2章　平成16年度山口大学埋蔵文化財資料館の活動報告

当館は、昭和53年(1978)設置以降、山口大学構内が所在する各遺跡の調査・研究を行うとともに、収蔵資料の展示・公開、また埋蔵文化財・考古学にかかわる教育活動を行ってきた。より具体的に述べると、展示・公開活動としては当館展示室における常設展示の他に年に1回の企画展示を行うこと、教育活動としては年に1回の市民対象の公開授業を開催すること、また学内の希望者に対して考古資料の取り扱い等の技術指導を行うことなどである。その他にも、学内外のニーズに応じ、随時展示解説会や出前授業などを行っている。

平成16年度は国立大学法人化の初年度であり、当館は山口大学学術情報機構の1組織として位置づけられることとなった。つまり当館は埋蔵文化財を素材とした学術情報の収集・発信をさらに推進させることが期待されていると言える。

表7　埋蔵文化財資料館利用者の推移

年度	平成7	平成8	平成9	平成10	平成11	平成12	平成13	平成14	平成15	平成16
利用者総数	355	267	191	200	516	142	555	573	913	669



第1節　資料館における展示公開活動

第20回企画展「古代の周防國」を開催

主催　山口大学埋蔵文化財資料館

共催　山口大学エクステンションセンター

昭和63年度より毎年1回から2回開催してきた企画展も、平成16年度で記念すべき20回目を迎えることとなった。そこで第20回企画展は、当館による近年の調査で明らかになりつつある吉田遺跡の古代の様相に焦点を当てることにした。

写真53　企画展ポスター・展示目録

吉田遺跡の古代に関しては、墨書土器や円面硯、木簡などの文字と関連する資料や、古代官人の腰帯飾りである石製丸鞆などの存在から、古くから「官衙」の存在が推測されてきた。近年の調査ではその可能性をさらに高める新資料が続々と発見されている。そこで今回の企画展では吉田遺跡の官衙関連資料と周辺地域の官衙関連資料とを比較

展示することにより、古代周防國の歴史環境の復元を試みた。

吉田遺跡出土品以外の展示資料としては、山口市教育委員会、防府市教育委員会、小郡町教育委員会、財団法人山口県教育財団山口県埋蔵文化財センターの協力を得て、周防国府跡、周防鋳銭司跡、陶窯跡群百谷1号窯、末田窯跡群、赤迫遺跡、赤妻遺跡、下糸根遺跡、八ヶ坪遺跡など地域を代表する古代遺跡の出土品を一同に公開することができた。

企画展開催期間は平成16年11月6日から12月24日までと短期間開催ながら、入館者総数は295名におよんだ。観覧者からは、「硯の形がおもしろく、印象に残りました。」「古代人もベルトをしていたことにおどろいた。」「遺物から当時の人々の生活を想像できることを実感しました。字を書くことができるほどの才がある人もいて驚きました。」「周防の國はすごいな♥と思いました。土器とかもスゴかったです。」などの感想とともに、「当時の生活でも、もっと具体的なことを知りたかったです。」「考古学における専門用語もいくつか説明してもらえればありがたいと思います」などの御意見も寄せられた。

当初短期開催として計画した企画展であったが、予想以上に展示への反響が大きかったため、関係機関の協力の下、「常設展」と名称を変更したものの同じ展示内容で開催期間を延長することとなり、結果的に1年間に及ぶロングランを記録した。

当館では、長年にわたる埋蔵文化財の調査・研究の成果を生かし、多方面から構内遺跡の情報を発信するとともに、今後とも「実物展示」を最大の特徴とした常設展・企画展を開催していく所存である。

写真 54　第 20 回企画展の展示模様

第2節　資料館における社会教育活動

第4回公開授業「古代人の知恵に挑戦！ ―弥生土器をつくってみよう―」を開催

はじめに

当館では、平成13年度より、考古学や埋蔵文化財、山口大学構内遺跡の調査研究成果を地域の皆様に身近に感じていただくことを目的として、公開授業を開催している。

第4回目となる今年度の公開授業は、吉田キャンパスなどから出土した弥生土器を観察し、それらを参考にして実際に自分で土器をつくってみるという内容で、平成16年12月4日（大学会館会議室）、12月18・19日（埋蔵文化財資料館横）の延べ3回にわたり行った。今回参加していただいたのは、小学生3人、保護者・一般10人、総勢13人の皆様であった。以下で授業内容を報告したい。

平成16年12月4日（土）～粘土から土器をつくってみよう！

午前の部では、土器の歴史や弥生土器について、プリントやスライドにより学習した後、埋蔵文化財資料館の企画展「古代の周防國」を見学した。

午後の部では、館員から土器の製作方法について説明を受け、出土品や館員が製作した土器を見て学習した後、実際に土器の製作を行った。粘土は市販の野焼き用粘土を使用した。参加者は粘土の扱いに苦労していたが、大変熱心であり、終了時間までに2～3個の土器や土笛を製作した。いずれも古代のイメージを形にした個性あふれる力作であり、その後、室内で自然乾燥させた。

平成16年12月18日（土）・19日（日）～土器を焼いてみよう！

土器の焼成にあたっては、近年の研究で弥生時代の土器の焼成方法として推測されている「覆い焼き」で、具体的には以下の順序で行った。

①地面に藁を敷いて薪を積み上げる。
②薪の上に土器を載せて藁で覆う。
③藁の上を赤土をこねた粘土により覆う。
④窯の下部に点火口を空けて、あらかじめおこしておいた炭火を入れ、窯の上部に空気穴を5～6ヶ所空ける。
⑤その後、約1日かけて焼き上げる。

上記の作業は自由参加としていたが、ほとんどの受講者が積極的に参加した。特に赤土をこねて粘土をつくる作業は、寒い上に汚れやすく、予想以上の重労働となったが、参加者全員で2つの窯をつくり、午前11時に点火した。今回は温度計を準備できなかったため、残念ながら温度計測を行っていないが、他の多くの実験例同様、徐々に窯の温度が上昇していく状況を観察できた。

12月19日（日）～土器の完成！

点火後、約23時間経過した19日午前10時から土器の取り出しを行った。挨拶と状況の説明の後、随時説明、記録を行いつつ参加者全員で窯の上部を壊して土器を取り上げた。まだ、窯内は熱く、軍手着用の上での慎重な作業となった。幸い、一つの土器も割れることなく焼き上げることができ、無事に公開授業を終了することができた。なお、参加者が作成した土器の一部は平成17年2月10日まで埋蔵文化財資料館で展示させていただいた。

公開授業を終えて

土器の歴史と弥生土器についての授業は小学生の参加者にはやや難解なものとなり、土器の製作にも苦労する傾向があったので、今後はより配慮する必要がある。しかし、土器の製作、焼成時の作業に

ついては、「また土器をつくってみたい」という声が参加者全員から聞かれ、大変好評であった。当館では、今回の授業と参加者からの声を踏まえ、体験メニューを増やすなど、さらに充実した授業を行いたいと考えている。

授業風景

第４回公開授業ポスター

土器の製作

土器の積み上げ

泥で全体を覆う

焼成終了

土器の取り上げ

できあがった土器と参加者

写真55　第4回公開授業の模様